

【実践内容】

○単元目標

- ・水産業がさかんな地域について調べ、その地域の特色や人々の工夫や努力、悩みをとらえると共に、そうした人々が水産資源や環境を守りながら漁業を進めていることに気付く。

○実践概要

○「寿司ネタはどこでどのようにとれるのか」

- ①お寿司に使われている魚介類の名前を当てる。*寿司ネタの写真を提示
- ②これらの寿司ネタがどこでどのようにとれるのかを予想し、それぞれについて調べる。
- ③「小田原でさかんな定置網漁とはどのような漁なのか。」「小田原ではどんな魚がとれるのか。」

*定置網の一部分の実物を提示

○小田原でさかんな漁業について調べよう。

- ①小田原漁港、相模湾水産試験場の見学に行こう。
- ②とれる量が不安定なのに、どうして漁を続けているのだろう。

○未来につながる漁業への取り組みについて考えよう。

知的好奇心について

子どもに身近な「寿司ネタ」という素材から、その裏にある漁業に携わる人の工夫や努力、願いに近づいて行けることをねらいとした。寿司ネタ当てクイズは、ゲーム性があることに加えて、子どもの誰もが自分の生活経験から答えられるものであるため、興味関心が高いと考えられる。さらに、予測・調査可能な問いによって、「調べてみたい、確かめたい。」という知的好奇心が抱かれると考えた。そうして日本全体の漁業の実態と漁法に触れる中で小田原の漁業に目を向けていく。小田原が日本三大定置網漁を行っていることを知れば「詳しく知りたい。」との思いが抱かれると考える。また、さらに知的好奇心を喚起するために、台風の被害で切れてしまった定置網の一部分も用意する。これによって定置網の大きさや重さについてだけでなく、「それによってどれぐらいの被害があるのか」など、自然と共存する漁業の姿やその問題点などについても迫っていけると考えた。こうして膨らんだ思いを元に、試験場の見学やインタビューなどを通して、小田原の漁業について学習し、最後に日本全体のこととして問題や解決策についても一度捉えていけることを期待した。

【子どもの様子・反省】

寿司ネタの導入では、どの子どもも意欲的に取り組んだ。お寿司のネタは教師が意図的に選んだものである。その中にはアジも含まれていたため、「知ってる。小田原でとれるらしいよ。」と言う声が上がった。そして他のネタはどこでとれるのかということが話題になり、次への課題として繋がっていった。「どのようにとれるのか」と言った漁法に関する視点は、子どもからは出なかったため、これについては教師の方から投げかけた。調べるネタは子どもが選び、自分なりの方法で問題解決を図った。構想では、次に、調べたことを出し合う中から、小田原の定置網漁について焦点を絞っていこうと考えていた。しかし、定置網漁については教科書や資料集で「ある程度調べられた。」という気持ちになってしまったことに重ね、早川漁港へは4年生まで何度か行ったことがある子どもが多かったことなどから、さらに小田原について深めていきたいという気持ちが膨らまなかった。そこで、試験場から借りてきた定置網の一部の実物を見せた。その重さや大きさだけでなく、ワイヤーの切れ方の激しさなどから、定置網についての想像を膨らまし、「全体ではどれぐらいの大きさなのかな。」「台風で切れちゃってその後どうしたのかな。」と知的好奇心を膨らます子どもの姿が見られた。

身近な素材から、本学習に入っていたことはよかった。子どもの思いを大切にすることで、他の教科で猟師が出てきた際にも、ここで学んだ漁師の生き様を話題に出す子どもがおり、ここでの学びが生きていることがわかった。クイズによって抱かれた興味関心から、知的好奇心を抱き問題に迫っていくまで、教師が焦らずにじっくりじっくりと、個と全体をみとりながら進めていくことが重要であると、改めて痛感した。

